

# 芭蕉蔵

## 優秀作品発表

第10回

### 兼題「朝」の部

特選第一席

服薬を忘れし朝の四温かな

特選第二席

道場に響く弦音冬の朝

特選第三席

天神の折鶴尖る寒の朝

### 【講評】

今回の兼題「朝」は、一見使いやすい言葉に見えながら、使い方に注意の必要な言葉です。無理に「朝」の字を入れたためにせつかくの句意のポイントが曖昧になっている投句作品が散見されました。特に兼題句の場合には、一句が出来上がったら、兼題が浮いていないか、効果的に働いているかを見直したいものです。

さて、特選第一席は平凡な日常生活の朝の一コマを描きながら、季感をしっかりと伝えていきます。飲まなければならぬ薬をすっかり飲み忘れることはよくあることですが、それは体調がよい証拠。しかも、まだ冬にありながら、比較的穏やかな日和が続いているのでしょう。そういった、天候と体調が佳品を生み出しました。

第二席は、寒さの厳しい朝の弓道場の

千代田区 野尻正雄

練馬区 小澤陽平

伊勢原市 中本郷顔

情景を聴覚的に伝えることで、視覚的に想像させるという構造の作品となっています。弓道部の稽古でしょうか。シーンと静まりかえった中に響く、ピシッという弓の音。その後で聞こえる、的に矢の刺さる音。というように、言外の音と景をも伝える作品です。冬の朝の寒さと緊張感が心地よく描き出されています。

第三席は、天神に備えられた折り鶴だけに焦点を絞ることによって、多くのことを読者に想像させる作品です。受験生が合格祈願のために捧げた折り鶴でしょうか。「尖る」の一語が几帳面な折り方、そして、そこへ込められた祈りの大きさを表現しています。「寒の朝」だけに余計、尖っているように感じられたのかも知れません。

### 【入選】

- あたたかや朝刊大きく広げ読む 板橋区 加藤修
- カーテンの薄日眩しき朝寝かな 文京区 小池仁郎
- 薄水を目覚めさせたる朝日かな 練馬区 小林和子
- 初風や朝日眩しき船溜 さいたま市 小山光彦
- 立春や無人の駅に朝日差す 杉並区 佐藤一樹
- 朝市の張りのある声若布売 文京区 杉山保廣
- 恋猫の朝より髭をつくろへり 東久留米市 夏目忠
- こんこんと竹に雪ふる朝かな 習志野市 本城宏基
- 朝市の売声若き春の風 調布市 水谷友二
- 朝まだき東風に乗りたる鐘の音 横浜市 吉田みち

### 【添削例】

- 春の航ナイフとフォークの 朝餉かな(原句)
- 朝食のナイフとフォーク ← 春の航(添削句)
- 朝顔や思い出はもう風の中 ← 朝顔の思ひ出もまた風の中
- 鬼やらい豆の隠れし靴の朝 ← 鬼朝の靴の中なる鬼の豆
- 寒明けの口元ゆるむ朝鏡 ← 鏡中にゆるむ口元寒の明け
- 表青む朝故郷出でにけり ← ふるさとを出づる朝や表青む
- 雪原にぶすぶすする長靴のあと ← 雪原に長靴の跡ぶすぶすと
- 春禽の声へ思はずカメラ向け ← 春禽の声へと向けるカメラかな
- 受験子やつけるだけつけ守り札 ← あるだけの御守りつけて受験生

# 自由題の部

特選第一席

失敗も思ひ違ひも長閑なる

杉並区 佐藤一樹

特選第二席

行く春やつじつま合はず嘘一つ

調布市 桑名優佳

特選第三席

熱爛や妻の本音の独り言

文京区 小池仁郎

## 【講評】

特選第一席は、具体的な物が何一つ出てこない、観念的な作品です。こういう句の場合、読者全員に伝わる普遍性があるかどうかが巧拙の分かれ目となります。季語の斡旋の仕方一つで説得力を生んだり、独善的になったりするものです。通常、「失敗」や「思ひ違ひ」はマイナスのものとされますが、それすらものどかであると断定したことによって、いかにも春の日ののんびりとした気分が描き出されました。

第二席も同じく観念的な作品です。つじつま合わせの嘘をつかざるを得ないという重い心情と、去りゆく春へ寄せる心とが微妙な不調和音を奏でています。季節の変わりめの人間の営為の一端を描出した佳句です。第三席の作者の飲んでいる熱爛。その傍らで妻の洩らした「独り言」。冬の夜の、長年連れ添った夫婦の姿が見えてきます。くれぐれも飲み過ぎと奥様のご機嫌にご注意下さい。

## 【入選】

水仙の風に押されて起立せり  
縁側に猫ながながと春隣  
手袋や母さんの歌思ひ出し  
春一番画鋏だらけの掲示板  
漉く和紙に雪の匂へる奥出雲  
磨り減りし撫で牛撫でる受験生  
明るさに降り立つ庭の寒さかな  
春めくや都心の空に飛行船  
春愁ひ女人高野の塔の下  
病棟のカーテン白し冬木の芽

練馬区 伊藤たか子  
若葉区 梅林秋浪  
松戸市 加藤浩雲  
文京区 杉山保廣  
伊勢原市 中本萬里  
千代田区 野尻正雄  
鎌倉市 細田俊  
習志野市 本城宏基  
調布市 水谷友二  
吉川市 山口方子

## 応募方法

- 1 応募用紙を明治大学ホームページからダウンロードするか、あるいはA4用紙に次のことを記載の上、郵送又はファックスで応募してください。  
[http://www.meiji.ac.jp/koho/desukara/info\\_book/zasshi\\_bashokura.html](http://www.meiji.ac.jp/koho/desukara/info_book/zasshi_bashokura.html)
- 2 未発表作品に限ります。
- 3 自由題と兼題のそれぞれ2句まで応募できます。応募は無料です。
- 4 自由題と兼題、どちらかを○で囲む、あるいは記してください。  
(1枚の用紙に自由題と題詠の併記は不可)
- 5 住所・氏名・電話番号・作品等、必要事項を記入してください。  
※ペンネーム(併号)の場合も、必ず本名を併記してください。
- 6 文字は楷書で記してください。
- 7 応募作品は返却しません。
- 8 特選に選ばれた方には特製図書カードを贈呈いたします。

応募先 明治大学経営企画部広報課 芭蕉蔵係  
〒101-8301  
東京都千代田区神田駿河台1-1  
TEL03-3296-4083 FAX03-3296-4087  
※只今、専用メールアドレスを開設準備中です。  
決定しましたら明治大学ホームページでお知らせします。

☆次号兼題 「母の日」5月15日必着



選句・講評

## 西山春文

本学商学部教授

「狩」同人、俳人協会幹事、  
日本文藝家協会会員